

「鹿おどし」と 「人口減少社会」

私は「寺社めぐり」が趣味でいろいろな寺院を訪ね歩いてきました。京・洛北の詩仙堂で有名なのが「鹿おどし」。石を叩く音が静寂の中を響き渡るさまは、まさに日本庭園の風流の極みですが、その仕組みは、竹筒に少しずつたまった水が、ある点を越えるとバランスを崩壊させ、一気に落ちるというものです。

この「鹿おどし」と同様の現象が実社会でも起こっています。環境問題や人口減少問題。こういった問題はじわじわと進行し、数年単位では大きな変化が起きないため、事の重大さを実感しづらい。しかし、臨界点を超えると鹿おどしが落ちるように一気に大変な状態に陥ります。そうなった時はもう手遅れでどうすることもできません。鹿おどしが落ちる前にどう手を打つか、そこが重要なのです。ところが、易きに流れ、どうしようもなくなるまで手を打てないのが人間の習性。それは20年以上前から予測されていた人口減少社会や少子化にこれまで抜本的な対策が講じられてこなかったことから明らかです。人口が1億人を超える先進国の中で初めて、少子化と高齢化が同時に進行し、人口減少社会を迎える日本。環境問題と同様、この問題についてもわが国は他国に対して何らかのモデルを示すべきでしょう。日本はどうするのか——行政・企業・個人それぞれが対応を考える時に来ています。

では、どうすればいいのか。それが非常に難しい。一度崩壊してしまうと元に戻すには相当な力が必要ですから、まだ少し猶予のある今がラストチャンスです。われわれが、今後の社会では人口減少と少子化・高齢化が進むということをきちんと認識し、「この国のかたち」をどうするのかを考えるしか方策はありません。

約6,400万人の就業者のうち、これからの10年間で団塊世代を含む約1,500万人が定年年齢に達するなど、確実に労働人口は減少します。日本経済が一定の水準を



中野 健二郎 氏

Kenjiro Nakano

三井住友銀行副会長

保つためには、65歳までの定年延長の法制化をはじめ、就労意欲のある女性の活用、海外の労働力の受け入れなど労働力を増やす努力が不可欠です。また、高齢化という現実を前に、世代間扶養が前提の年金制度についても、本当に今の制度を続けるのか国民的な議論が必要でしょう。それに加え、国や地方の公務員・議員の削減を含め、住民数の減少に応じた行政のスリム化も検討しなければなりません。廃藩置県以来、約140年続いてきた都道府県の仕組みも制度疲労を起こしているのかもしれない。

というのも、日本は明治維新後、それまでのゆがみの蓄積から60年ごとに大きなクラッシュが起こり、それにより社会が変革を遂げてきました。戦後60年あまり、再度、変革の時を迎えているのではないのでしょうか。これからの時代にあった社会システムとは何かを考え、改革していくのです。例えば法律。現在の法律は人口が増加し、経済が成長する前提で作られています。人口減少が始まり、前提条件が変わっているのに法律は変わらず「時代遅れ」となっています。これを「時代に即した法」に一刻も早く改めねばなりません。行政任せにせず、経済界や団体、個人が声を上げ、発信し続けていくことが変化につながります。

また、どのような問題でも少し離れた視点で見るとよく見えるようになります。現在の日本は、「鹿おどし」が落ちる前に、世界とのかかわり方も含め、広い視野に立った変革を迫られているのです。

談